

難治緑内障の治療へ期待

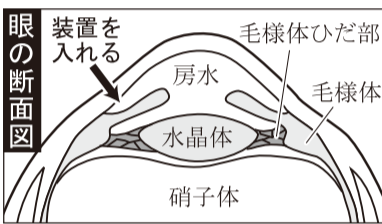
島根大学医学部

谷戸教授のグループが開発

出雲市塩治町の島根大学医学部眼科科学講座・谷戸正樹教授(51)のグループは23日、同大学附属病院で会見し、治療が困難な緑内障(難治緑内障)を対象に新しい眼圧下降治療「グリーンレーザーECP」を開発したことを発表した。内視鏡の中にレーザーを組み込んだ装置で、国内では初めて。2022年7月からこれまで同治療を行った6症例は順調に経過しており、今後、難治緑内障の治療法として期待される。



「グリーンレーザーECP」を説明する谷戸正樹教授＝23日、島根大学医学部附属病院



緑内障は、眼と脳をつなぐ視神経が徐々に萎縮する病気で、失明の原因としてはわが国1位。国内では392万人、疑いを含めて586万人の患者がいるとされる。眼圧を低く保つことで進行が遅くなるという特徴があり、眼圧を下げる

治療には薬物治療、レーザー治療、手術がある。中でも約10年前から行われている「チューブシャント手術」が最も効果が高い治療として行われている。しかし、同手術でも眼圧が十分下降しない、または同手術を行うことができない症例があるという。

谷戸教授のグループは、内視鏡やカテーテルなどを製造しているファイバーテック社(本社・千葉県佐倉市)と共同で2014年から、内視鏡的毛様体光凝固術(ECP)装置の開発を進めてき

た。ECPでは、通常観察することができない毛様体のひだ部を、特殊な内視鏡で観察しながらレーザーで焼く。その結果、毛様体から作られる眼の中の水(房水)が減って眼圧が下降する。同教授らは、手術の安全性を高めるため、組織への

深達度が低く、焼き過ぎを抑制できる「グリーンレーザー」を世界で初めて採用。開発された装置は昨年、国から医療機器として承認を受けた。

他にも4施設で予定されている。今後は、他の施設での治療効果の確認、機器の普及などを目指すという。



同装置による手術風景＝患者の同意を得て撮影(同病院提供)

承認された機器で昨年7月から治療を開始。これまで10代から80代の難治緑内障患者6人(うち山陰在住2人)に計8回手術を行い、眼圧は約35%下がった。重篤な合併症はないという。現在、国内では同病院を含め4施設で実施されており、

「従来の手術では難しかった患者の救済になると思う。各地域の基幹施設でこの治療が普及してほしい」と述べた。同病院の椎名浩昭院長は「地域医療に貢献でき、全国的にも展開していける治療法だと考えている」と話していた。